

近代チベット史叢書



▲ チベットの首都ラサ市 ポタラ宮

ヒマラヤの峻嶺に抱かれた天空の仏教国「チベット」。古代よりインド、中国、モンゴル等と密接な交流を持ち、近代には、英国、ロシア、そして日本などの「列強国」が関心と野心を抱き、接触を試みてこの「秘境」へ挑んだ。

古来の宗主権を主張する中国と、利権を狙う外国勢力…近代チベットは、緩衝国として秘境を保ち得ながらも緊迫した国際情勢に翻弄される、波乱の歴史であった。

そして第二次世界大戦後——

チベットは名実ともに中華人民共和国領となり、伝統的な社会制度・民族文化は未曾有の変貌を遂げた。その一大転機として、最も追憶すべき日、即ち…

——1959年3月10日のチベット民族蜂起より50年——

今日にわかに世界的注目を集めるチベット問題。

近代チベットの歴史と往時の民族文化を記した貴重な史料・著作の数々、ここに蘇る！

2009年2月 シリーズ刊行開始！

仏教学者として調査に赴き、帰国後親善を訴え続けた日本人、中央アジア一円を踏破し、最後の秘境に挑んだ北欧の探検家、時のダライラマ13世政府の篤い知遇を得た英国外交官…等々

鎖国を保ち、まさに秘境であったかつてのチベットに入境した数少ない外国人たちの遺した稀少な著述—その歴史的価値は、いま一層の意義を帯びつつ深い示唆をもって現代人に語りかけるであろう。

「近代チベット史叢書」推薦文

大正大学学長 小峰 彌彦
仏教学博士

2009年は、1959年のチベット民族蜂起より50年の年にあたる。昨年の北京オリンピックの折りにも解放問題をめぐり、世界各地で解放を望む運動が顕在化したことは記憶に新しい。とはいえこの問題も、決定的な武力紛争までいたらなかったこと、さらには中国への配慮なども影響し、日本においての関心はそれほど高くなるには至らなかったのが現況である。だが、チベット問題は、当該の民族のみのことではなく、国際的にも重要な課題であることは間違いない。それ故、私たちはこの課題に真剣に向き合う必要があるが、そのためにはチベットに対する基礎的な知識を備えた上の正しい認識が不可欠となるのである。

本叢書は「20世紀初頭から第二次世界大戦に至るチベットの歴史と民族文化」を学ぶ基礎的な資料としても重要であるし、チベット問題の原点を考察する上で貴重な材料を提供している良書である。青木文教氏をはじめとする著者の体験を通しての報告は、読者に多くの知識と示唆を与えるものと確信するものである。

第1巻 第二次大戦下、チベットへの支援を訴えた外交官がいた！

チベット
西藏問題 —青木文教外交調書—

あおきぶんきょう
青木文教・著
外務省調査局／
慧文社史料室・編

A5判・上製クロス装・函入
定価7350円(税込)
ISBN978-4-86330-024-8

★記念すべき第1巻！ 2009年2月下旬刊行・絶賛発売中！

裏面に詳細解説があります

発行：(株)慧文社 〒174-0063 東京都板橋区前野町4-49-3
小社の書籍は、全国の書店、ネット書店、大学生協などからお取り寄せ可能です。

TEL 03-5392-6069 FAX 03-5392-6078
<http://www.keibunsha.jp/>